

■ 提 言 ■

新型コロナウイルス感染症 WG の活動と連携

和田 泰三

金沢大学医薬保健研究域医学系小児科学

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の緊急事態宣言が5月25日に解除されました。子ども達の元気な声が学校などにも戻りつつありますが、再び感染者が増加に転じており、心配な状況が続いております。日本小児感染症学会では、尾内理事長の命により新型コロナウイルス感染症ワーキンググループ (WG) が2月に立ち上げられ、この未知のウイルスと対峙する活動が開始されました。WGのとりまとめ役を拝命しました関係で、今回WGの活動をご紹介します機会をいただきました。

まだ目に見える成果は乏しいですが、「保育園における新型コロナウイルス感染症に関する手引き」を3月末に発行することができました。子ども達をみてる保育園などは、保育という点はもちろん、働く親御さんのためにも役立っており、濃厚接触者の考え方を示すなど具体的な対策を示すことは、社会機能を維持するという観点からも重要と思われます。現在、状況の変化に合うように手引きの改訂作業が進められています。

COVID-19との戦いは長期戦が予想されています。特に、今年の秋から冬にかけてインフルエンザなどの冬季感染症と混在した形での流行が危惧されています。COVID-19は基本的に風邪と区別できない可能性が高く、小児では重複感染も多く報告されており、小児科の通常診療に混乱が生じるかもしれません。さまざまなりスクをゼロにす

ることはできないと思われます、できるだけ少なくするために、また実践可能な形で診療を続けることができるように、使いやすいガイダンスを求めめる声が多く寄せられています。

そのようなガイダンスを作成するためには、内外の関連機関との連携が必要不可欠と思われます。小児科関連学会として日本小児科学会は言うまでもありませんが、他の小児科分科会や他学会との連携、行政との連携などが求められます。そして感染症への対応は、感染症診療と感染対策という車の両輪に例えられる2つの大きな柱が重要であると言われてはいますが、今回のCOVID-19ほどこのことを再認識させられた感染症はなかったと思われます。感染制御や医療安全という点からも連携が求められます。さらに小児のCOVID-19では、直接的な感染症への対応に加えて、間接的な影響への対応も必要です。親子ともに感じるストレスの増大、虐待や困窮家庭の増加、予防接種や健診の受診控えなど、子ども達はさまざまなりスクの増大に直面しています。こころの専門家や福祉などとの連携も必要と思われます。小児の感染症の専門家である私たちが、今こそ力を合わせる時と思われます。

COVID-19の領域においても、本学会が担う社会的役割を果たしていけますように、会員の先生方のご協力とご支援をよろしくお願い申し上げます。